

第19回SGRAチャイナ・フォーラム

「琳派」の創造

共同主催：渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）、北京大学日本文化研究所、
清華東亜文化講座

後援：国際交流基金北京日本文化センター（申請中）

協賛：鹿島建設（中国）有限公司

2025 年 11月 22日（土） 15：00～17：20（北京時間）

16：00～18：20（東京時間）

言語：日本語・中国語（同時通訳付き）

会場：北京大学外国語学院新楼501（オンラインとのハイブリット開催）

開催趣旨

公益財団法人渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）は、日本の民間人による公益活動を紹介するSGRAチャイナ・フォーラムを、北京をはじめとする中国各地の大学等で2007年から毎年開催してきた。2014年からは趣向を変え、清華東亜文化講座のご協力をいただき、北京をはじめとする中国在住の日本文学や文化の研究者を対象としてSGRAチャイナ・フォーラムを開催、日中韓を中心とした東北アジア地域の近現代史を文化と越境をキーワードとして検討している。本年も、これまでの成果を踏まえながら、「東アジアにおける広域文化史」の可能性を探る。国立近代美術館の学芸員を長く務められた古田亮先生（東京芸術大学 大学美術館教授）をお迎えし、「琳派の創造」をテーマに、西洋の影響を受けて近代に創られた美術史の言説について考察する。日中同時通訳付き。

プログラム

総合司会：孫 建軍（北京大学日本言語文化学部／SGRA）

15：00 開会挨拶：野田昭彦（国際交流基金北京日本研究センター所長）

講演：古田 亮（東京芸術大学 大学美術館）

テーマ：「『琳派』の創造」

16：10 指定討論

討論者：戦 暁梅（国際日本文化研究センター）

中村麗子（東京国立近代美術館）

董 麗慧（北京大学芸術学院）

16：40 自由討論

モデレーター：林 少陽（澳門大学歴史学科／SGRA／清華東亜文化講座）

17：10 閉会挨拶：王 中忱（清華東亜文化講座／清華大学中国文学科）（予定）

講演内容

「琳派」は、一般に日本美術史上に現れた流派の一つととらえられている。江戸時代初期に活躍期を持つ俵屋宗達や本阿弥光悦らによってそれはつくられ、尾形光琳や酒井抱一によって受け継がれて近代に至ると説明されることが多い。しかし、実際には二つの点でそれは間違っている。一つは、その間に「琳派」と名乗った画家は一人もいないこと。つまり、尾形光琳の「琳」に由来するこの用語は光琳以前に存在しなかったことはもちろん、光琳自身も使わず、抱一の時代にもなかった。「琳派」という用語は近代に創造されたのである。もう一点は、江戸時代の宗達、光琳、抱一には直接の師弟関係がなかったばかりか、狩野派のような流派としての家のつながりもない。光琳は時代を超えて宗達を発見し、抱一もまた時代を超えて光琳を発見した。その関係は私淑というべきものであった。

一方、「琳派」が近代に創造されたと言うとき、それは学術研究の結果ではなかった。歴史に沿って宗達、光琳、抱一という流れがはじめから認識されていたのではなかったのである。まず、明治時代後半（19世紀末）、ジャポニズムに端を発してヨーロッパから〈日本らしい装飾芸術〉として光琳が注目された。ついで大正時代に、個性主義という20世紀初めの芸術観のもとに宗達の芸術が再評価された。本発表では美術史家よりもむしろ近代美術の同時代のムーブメントのなかで「琳派」という伝統が作りあげられていったことを明らかにする。

講師略歴

<古田 亮（ふるた・りょう）FURUTA Ryo>



1964 年東京都生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科日本東洋美術史専攻博士後期課程中退。1993 年より東京国立博物館に勤務。東京国立近代美術館主任研究官を経て、現在東京藝術大学大学美術館教授。企画した展覧会に「揺らぐ近代」（2006年）、「夏目漱石の美術世界」展（2013年）、「横山大観展」（2017年）、「大吉原展」（2024年）など多数。著書に『俵屋宗達 琳派の祖の真実』（平凡社）、『もっと知りたい速水御舟』（東京美術、共著）、『特講 漱石の美術世界』（岩波書店）、『横山大観 近代と対峙した日本画の巨人』（中央公論新社）ほか。

『特講 漱石の美術世界』は『夏目漱石の美術世界』（江蘇鳳凰美術、2025年）として中国語訳も刊行されている。

討 論 者 略 歴

<戦暁梅（せん・ぎょうばい）ZHAN Xiaomei>



国際日本文化研究センター／総合研究大学院大学教授。学術博士。専門は近代日中美術交渉史。文化史の視点から近代日中美術の形成、変遷において、西洋の影響と異なる内的要因の究明を目指している。主な著書に『鉄斎の陽明学』（勉誠出版、2004）、『近代中国美術の胎動』（瀧本弘之との共編著、勉誠出版、2013）、『近代中国美術の境界——越境する作品、交錯する藝術家』（瀧本弘之との共編著、勉誠出版、2022）、論文に「中日美術界の合従：「中日絵画聯合展覧会」的成立始末」（中国語、2017）、「廉泉「小萬柳堂書画コレクション」の初来日再考——『南湖東遊日記』を主な手掛かりに」（2022）、「富岡鉄斎の晩年における藝術の伴走者たち——鉄斎と京大中国学の人々」（2024）などがある。

<中村麗子（なかむら・れいこ）NAKAMURA Reiko>



東京国立近代美術館主任研究員。専門は日本近代美術史。東京大学大学院人文社会系研究科（美術史学）博士課程中退。2003年より東京国立近代美術館に勤務。同館で「竹内栖鳳展：近代日本画の巨人」（2013年）、「生誕110年片岡球子展」（2015年）、「生誕150年横山大観展」（2018年）、「あやしい絵展」（2021年）などを企画。共著に『もっと知りたい竹内栖鳳：生涯と作品』（東京美術、2013年）、『もっと知りたい片岡球子：生涯と作品』（東京美術、2015年）、論文に「明治期から昭和初期における伊藤若冲の受容について——文献分析を中心に——」東京大学大学院人文社会系研究科・文学部美術史研究室紀要『美術史論叢』19号（2003年）、「近代の琳派観、その周辺」『琳派RIMPA展』図録（東京国立近代美術館、東京新聞、2004年）など。

<董麗慧 DONG Lihui>



北京大学芸術学院研究員・博士課程指導教員。中国国家「万人計画」青年トップ人材、北京大学博雅若手学者。芸術学博士号（清華大学美術学院）、美術史博士号（ピッツバーグ大学）を取得。主な研究分野は、近現代美術理論、ビジュアル・カルチャー研究、異文化の美術交流研究。近年、国内外の学術誌に30篇余の論文を発表し、『中国人民大学複印資料』にも転載されている。著書に『御容と真相——近代中国視覚文化の転換（1840-1920）』、『西洋図像の中国式転訳——16・17世紀中国キリスト教図像研究』がある。国家級科研プロジェクト2件を主持し、国家社会科学基金芸術学重大プロジェクト、国家芸術基金の普及・交流・推進プロジェクト、ならびに国家芸術基金芸術人材育成プロジェクト等に参加。

北京大学黄廷方／信和青年傑出学者賞ならびに『芸術設計研究』『国学与西学』等の学術誌年間優秀論文賞を受賞。